

日本海にぎわい・交流海道ネットワーク シンポジウム

災害支援活動紹介 <きずな支援>

講師：海上自衛隊舞鶴地方総監部 管理部長 堀井 博



皆様、こんにちは。ただいまご紹介いただきました海上自衛隊舞鶴地方総監部管理部長の堀井でございます。

本日は、日本海にぎわい・交流海道ネットワーク総会及びシンポジウムの開催、誠にありがとうございます。

本日は、時間を頂戴いたしまして、先ほど司会の方からも紹介いただきました、3月11日に発生いたしました東日本大震災における海上自衛隊の災害派遣活動について、ここ舞鶴の地から海をアクセスしたルートで派遣いたしました災害派遣の状況をご紹介させていただきたいと思っております。

“きずな”と“にぎわい”ということでございますが、“にぎわい”というのは、海上自衛官も何千人とおりますが、主として限られた区域で夜の街の“にぎわい”には貢献しているんですけれども、“きずな”ということになりますと、ご承知のとおり、海上自衛隊というのは海を活動の場といたしますので、直接国民の皆様方と触れ合う機会が陸上自衛隊ほどはございません。

今回の災害派遣につきましては、実際に三陸沖に派遣いたしまして、先ほど来、先生方からお話がありました、地元の方々等との“きずな”、人と人との付き合い、顔を見て人間同士が付き合うということで、非常に“きずな”というものが重要だなど

感じた次第でございます。

海上自衛隊の災害派遣の枠組みでございますけれども、都道府県知事、それから海上保安本部長、空港長等の依頼に基づいて派遣されるというのが本来の形でございます。ただし、さきの阪神・淡路大震災の折、やはりもっと早く出動するべきだったという反省から、現在は、震度5弱以上の地震があったときには、自主的に、直ちに現地に派遣するという形が基本的な枠組みとして出来ている次第であります。

それで、3月11日、2時46分、私事ではありますが、ちょうどその日、父親の法事で秋田に帰っておりました、秋田でもやはり非常に強い揺れがあり、何が落ちこちてくるかわからないような状況でありましたが、発災から約11分後には、下北半島にあります大湊の海上自衛隊の航空基地から、ヘリコプターが直ちに被害状況の偵察ということで離陸しております。

また、24時間、365日、日本上空をP3Cという航空機が哨戒しておりますが、日本海を飛んでいた航空機が、発震後、直ちに三陸地方に向かい、状況視察を行いました。また、それのみならず、横須賀から護衛艦「さわゆき」が、地震発生から53分後には出港しております。

普段の出港であれば、計画的に、こういう日程で、こういうふうは何をして、どこに行けと言うんですが、ともかく出港しろという命令で艦艇が出て行きました。

地震の翌日には20隻の艦艇が現場において救助活動を開始しており、13日、翌々日には海上自衛隊の艦艇が60隻、現場で活動しました。後ほど写真でお見せいたしますが、海上自衛隊の中で大きいものから小さいものまであります。大きい艦ほど水面下の深さが大きいため、海に流された障害物等が非常に多くて、なかなか沿岸地域に入っていけないので、比較的小さな艇も大いに活躍した状況であります。

海上自衛隊には5つの総監部がありますけれども、ここ舞鶴総監部は日本海を警備担当する唯一の総監部で、その守備範囲は、北は秋田から南は島根まであり、この舞鶴から出港した艦艇は、津軽海峡を通過して現場に進出いたしました。早い艦艇だと約一日、二日で行きますが、小さい艦艇ですとなかなかスピードが出せませんので2泊3日の長旅になります。

海上自衛隊が地震発生後、三陸沖に派遣した艦艇、航空機、人員等につきましては、表記のとおりですけれども、艦艇については約60隻ですね。航空機は約100機です。それとあと人員については約1万4,000人。自衛隊10万態勢で臨んでやっておりますけれども、本来任務である警戒監視等もありますので、約4万5,000人おります海上自衛隊のうち、約1万5,000人が派遣されております。



これは、各地から直ちに緊急出港したときの様子であります。基本的に艦艇が出港するときには、必要な食べ物とか、あるいは燃料とか、こういったものをちゃんと積んで出かけて行くんですが、少しでも速く被災地に向かうことを優先して、必要な

ものは後から補給する、乗員も他の艦艇又はヘリコプター等で運ぶということを行いました。

実は、この災害の時に「自衛隊をなめるなよ」というような話がありました。ある自衛官の奥さんが、災害派遣に出て行くご主人に、『色々これから大変だと思うけど無理しないで頑張っってね』と、愛情たっぷりにメールを送ったんですが、それに対してその自衛官は「自衛隊をなめるなよ」と、『今、無理しないでいつ無理するんだ。』と返信したそうです。この「自衛隊をなめるなよ」、我々自衛官の“心意気”だにご承知いただきたいと思います。

舞鶴地方隊においては、一刻も速く被災地に駆けつけるため、食料も積まなければいけない、人も集めなければいけない、集まらなくてもとにかく出港するということが、我々だけでは到底賄い切れなかったところが多分にあるんですが、地元の方々の絶大なるご支援をいただきまして、舞鶴からは発災以降、艦艇が10隻、それから艦艇に搭載しておりますヘリコプターがございますが、舞鶴には約10機のヘリコプターが配備されており、その内3機が艦艇に搭載しておりましたので、そのまま被災地へ行って、搭乗員は入れ替わり、立ち替わり交代していた状況であります。



その他に、海上保安庁さんの“もぐり”、「海猿」という映画で結構有名になりました人命救助の方がおられますが、海上自衛隊にも“もぐり”がおります。彼らは海中の爆弾等を処理するための専門員です。海上保安庁は「海猿」だそうですけれども、海上自衛隊は「言わ猿」と言うそうです。その爆弾処理の潜水員を12名、3チーム派遣いたしました。またその他にも、舞鶴に自衛隊病院があり、医療関係の人間もおりますので、これも2チーム派遣いたしました。トータルで舞鶴から派遣した人員は、約1,100人に上りました。

その中でも、ヘリコプターというのは、やはり災害救助のときには海上自衛隊の任務などには非常に有効でありまして、地盤がしっかりしてない所でも活動することができ、人を救助したり、あるいは屋根の上に孤立されている方なんかをピックアップしたりすることができ、非常に役に立ったと聞いております。

現地の写真を見ていただきますと、先ほど喫水の深い艦艇は入っていけなかったとご説明いたしましたけれども、この写真をご覧いただければ、その様子が非常によくわかると思います。舞鶴から現場に向かった「まえじま」という艦艇がありますけれども、これは“掃海艇”と言いまして、先ほどお話しした海の爆弾を処理する艦艇なんですけど、木造で余り



大きくない50メートルぐらいの艇で、こういった艦艇は湾内までずっと行けますので、非常に活躍いたしました。左下の写真の「ながしま」というのも掃海艇であります。

人命救助が当然、最初の任務でありますので、家の中に残っておられる方がいないかとか、そういった所を確認するんですが、そのときには先ほど申しあげました“もぐり”、水中処分員が実際に海に潜りまして、家の中まで全部確認して、生存しておられる方がおられないかという捜索を実施いたしました。

輸送艦「のと」という、ビーチングといって浜辺にどんと乗り上げて、前が観音開きに開いて中から車なんかを降ろすというタイプの艦があるのですが、余り大きくありません。これはどういったところで活躍したかと言いますと、先ほど大学教授から話がありましたように、通行できる道路がほとんどなく、ガソリンや燃料の確保が難しくなったため、北海道から燃料等を送ることになったのですが、こういった石油とか原油とかは運ぶ量が限られているので、この小さい「のと」という艦が、たかだか時速20キロぐらいしか出ないんですが、津軽海峡を何往復もして活躍しました。

陸上自衛隊の話をちょっとさせていただきます。陸上自衛隊は、携行食という缶飯を持って活動しておりました。1回の活動で大体10日分ぐらいを持って活動しているんですけども、1回ボイルすると二、三日食べられて、結構おいしいんですよ。

そこで実話が2つぐらいありまして、まず1つ目は、この携行食を食べてから5日目、6日目ぐらいから、皆様方口内炎が非常にいっぱいできたというんですね。もう大変だったということでした。演習等で二日三日続けて食べるということはあったんですけども、10日ほど続けて食べたという実績がなかったので、結果としてビタミン不足になった。したがって、こちらの方からビタミン剤を送るというような、そういった貴重な教訓も得られたそうであります。

あともう一つ、この缶飯というものは鶏飯、五目飯、赤飯という3種類がありまして、彼らは、「被災者の前で絶対食事をとるな。それからトイレもするな。たばこなんかも吸うな。」と言われていたらしいのですが、陸上自衛隊員から『こうした状況下で赤飯は如何なものか』という意見が出て、直ちに赤飯は回収したそうです。ただ赤飯が一番おいしいんですね。鶏飯、五目飯に比べて数が多かったこともあるようです。そういった逸話もあったそうであります。

舞鶴には「あたご」という護衛艦がありますが、これも直ちに現地に駆けつけましたが、非常に大きな艦ですので、当然、港に入港することはできずに、小さな交通艇で行き来して上陸し、陸前高田の小学校の掃除とか、あるいは海岸の廃棄物処理等を実施いたしました。写真は、その時の乗員の活動状況です。

発災から2日目ですが、やはりイージス艦の「ちょうかい」という艦で、屋根の上で2日間、助けを求めておられた方を救助いたしました。この写真は拡大していますからこういうふうに見えますが、330



メートル離れていますとほとんど見えません。双眼鏡でやっと見えるぐらいですね。私は飛行機に乗っているんですけども、下から見ていけば飛行機が飛んでいったというのは分かるのですが、上から見たら本当に難しいんですね、搜索というのは。そういった所でギャップがあり、『海上自衛隊は我々を見捨てていった。』とか言われることもあるんですが、絶対そんなことはありません。このときは双眼鏡で見張りの隊員がを見つけました。それで先ほど言った交通艇で現地に行きまして助けたという状況であります。

もう一つは、発災翌日、幼稚園の方々、幼稚園の屋上に上がって被害は避けることができたんですけども、体が大分濡れてしまって、寒さに震えながら救助を待っておられました。ヘリコプターは近くに行けるんですけども、そこに園児たちがいるというのはわかっているけども、いかんせん救助の手が足りない。そこで心を鬼にして優先順序を決めて助けていったものですから、この方々は、ヘリコプターではなくて、護衛艦「たかなみ」搭載の交通艇で救助されました。



何でこんなときに赤い帽子をかぶっているんだという感じですけども、園児たちはクリスマスで使ったサンタクロースの衣装を防寒のために使って着ていたんですね。こういった小さい、いたいけなかわいなお子さんたちを助け出しました。

後日、この幼稚園の保育さんから、我々の活動中の隊員にお話があり、園児が「何でありがとうばかり言ってるの、こんにちはでしょ、あいさつは。」と言うんですけども、保育さんにしてみると、「いや、そなんじゃない。やっぱり助けてもらったというのは、人と人とのつながり、それこそ“きずな”で、ありがとうというのが正しい言葉なんだよ。」というようなことを言われました。

そのようなやりとりがあり、我々がお守りで持っているのがこれです。そのときの幼稚園の園児さんがこうやって書いてくれましたよと。多分、“海上自衛隊”なんていうのは誰かが教えないと書けないと思うので、大人の人がちょっと入っているような気もするんですけども、こういった絵を描いてもらったよということで日本全国に配られました。これをパウチしまして私も持っておりました。



更に、被災地の方々に喜んでいただいたのは『入浴』ということでした。やはり人間、入浴できないと滅入ってしまうというところがあるんですけども、艦では、海上生活をしていますので、比較的“衣食住”というのは安定しており、海水を真水に変えることもできます。移動は先ほど言いましたホバークラフトで送迎して、輸送艦

等で入浴していただきました。こうした活動もさせていただきました。

いずれにしても、今後とも皆様方との“きずな”を大切にしながら、国民の皆様方のために頑張っていきたいというふうに考えております。

簡単でございますが、私のほうからは以上でございます。ありがとうございました。

